

contents

第7回「青少年の性行動全国調査」(2011年)の概要… 1	今月のブックガイド……………11
北丸雄二のニューヨークレポート⑰…………… 9	JASEインフォメーション……………12
「ありのままのわたしを生きる」ために⑰…………… 10	

■調査報告

第7回「青少年の性行動全国調査」
(2011年)の概要

東北大学名誉教授 原 純輔

東北学院大学教養学部教授 片瀬 一男

1. 「青少年の性行動全国調査」の目的と特徴

今回で第7回を迎える「青少年の性行動全国調査」が開始されたのは1974年のことである。それ以後、1981年、1987年、1993年、1999年、2005年と、ほぼ6年間隔で続けられてきたが、最初から現在のような姿であったわけではない。調査地点を大都市、中都市だけではなく町村にまで拡張して「全国」調査の実態を備えるようになり、大学生と高校生に限られていた調査対象に中学生を加えて、「青少年」のかなりの部分をカバーできるようになったのは、1987年の第3回調査からである(表1参照)。その後も、調査地点数を増やす努力や、大学・短大進学者以外の若者(たとえば専門学校生)に対する調査可能性の検討などが続けられてきた。テーマや対象の性質上、この調査がさまざまな限界をもっていることは否定できないが、他方、この種のテーマや対象で40年近くにわたって続けられた調査は、国内はもちろん国外でも類例

はきわめて少ない。質問項目の中には、第1回目から継続的に用いられたものも少なくなく、日本の青少年の性行動や性意識の変化を全国規模で時系列的に把握することができることから、近年では、国際的にもその意義が認知されてきている。

ここで、「青少年の性行動全国調査」の特徴あるいはねらいを2点にまとめておくことにしよう。

第一の特徴は、先にも述べたように、継続的に行われてきた調査ということである。継続調査は、類似あるいは同一の質問を用いることによって、着目する社会や集団(今回の調査で言えば日本の青少年)の「変化をとらえる」ことにある。すなわち、この調査の基本的な目的は、これまでの調査結果と比較することにより、生理的・心理的・行動的な側面にわたって、わが国の青少年の性的経験(デート、キス、性交など)が年齢に伴ってどのように進行するかを明らかにするとともに、その進行状況の時代的变化を明らかにすることにある。また、性をめぐる規範意識、性知識やその情報源など、性にかかわる青少年の意識の実態とその変化を明らかにすることも、毎回の変わらぬ目的と

表1 「青少年の性行動全国調査」の調査地点と調査対象者数

調査（調査年）	調査地点数			調査対象者数					
	大都市	中都市	町村	中学生	高校生	専門学校生	短大生	大学生	合計
第1回（1974年）	3	7	—	—	3690	—	158	1152	5000
第2回（1981年）	3	4	—	—	2970	—	500	1519	4989
第3回（1987年）	3	3	3	3599	3270	—	489	1323	8681
第4回（1993年）	3	3	3	2016	2016	—	251	661	4944
第5回（1999年）	4	4	4	2187	2176	—	132	997	5492
第6回（2005年）	4	4	4	2187	2179	66	—	1078	5510
第7回（2011年）	4	4	3	2504	2578	—	—	2558	7640

注) ただし、第7回調査はウエイト付け後の対象者数である。

なっている。さらに、近年、注目されている性的被害の経験についても、1993年の第4回調査から調査項目に含めている。

もちろん、青少年の性行動や性経験については、その実態や変化を記述するだけでなく、そうした行動や経験における個人間および集団間での差異を、青少年をとりまく社会的背景に関連させながら理解することも重要である。今回の調査では、とりわけ近年の情報化の流れが青少年におよぼした影響に着目し、携帯電話の利用による友人関係のあり方の変容や、インターネットによる性情報の流れの変化と関連づけながら性行動の差異の原因を解明することも試みられている。

第二の特徴は、地域的・年齢的な偏りのない青少年の性行動の現状を明らかにする、というねらいをもっていることである。このため、中学生から大学生までを対象に、なるべく多くの多様な地点での実施をめざしてきた。いうまでもなく、年齢層を絞ったり、特定の地点に着目したりしていくという方法もあるが、多分、そうした調査とわれわれの調査とは、観点が異なっている。

限定された対象に行う調査は、その対象の「典型性」ないし「先駆性」に着目している。つまり、わが国の青少年の性行動における特徴が純粹（ないしは極端）な形で現れている（典型性）、あるいは今後わが国の青少年の間に一般化することが予想される性行動の特徴を既にもっている（先駆性）、という判断の下に対象が決定されているのである。これに対して、われわれの調査は、わが国の青少年のいわば平均的な性行動の実態を歪みなくとらえようとしている。その意味では、本調査は全国の青少年の性行動における「代表性」に着目しているといえる。

こうした両種の調査の目的は互いに排反的なもので

はなく、むしろ補完的である。たとえば、典型的事例や先駆的事例の紹介や議論は重要であるが、「典型性」「先駆性」の判断はともすれば独り合点になりやすい。「代表性」をもったデータと比較することによって、判断の妥当性が確かめられるのである。他方、平均的な実態を重視することは、ともすれば行動や意識のヴァリエーション（散らばり）を見失ってしまうおそれがある。「典型性」「先駆性」をもった、そして多分、平均的な姿からは大きく外れたデータは、平均値の背後に存在するヴァリエーションを、具体的に生き生きとわれわれに教えてくれる。

2. 調査の内容

前回の調査から、中学生と高校生以上（高校生・大学生）で調査票をわけ、2種類の調査票を用意した。以下の質問のうち、*がついた項目については中学生には質問をしていない。

(1) 性経験・性行動

射精・月経（経験の有無、初めて経験した年齢）

性的関心（経験の有無、初めて経験した年齢）

告白経験

デート経験（経験の有無、初めて経験した年齢、デートにおけるイニシアティブ・費用負担）

キス経験（経験の有無、初めて経験した年齢、キスにおけるイニシアティブ、動機）

性交経験（経験の有無、初めて経験した年齢、動機*、避妊の実行*、これまでの経験人数*、性感染症や妊娠への懸念*、避妊の方法*、避妊を実行しない理由*など）

マスターベーション経験（経験の有無、初めて経験した年齢）

(2) 性規範・性意識

性に関するイメージ

性別意識 (性別役割意識、性差意識、結婚観など)

性規範* (愛情のない性交、金品授受による性交、恋人以外との性交への態度など)

自尊感情

(3) 性的被害

セクシュアル・ハラスメント (経験の有無と相手)、

デート・ヴァイオレンス*

(4) 性教育と性知識・情報

性教育 (学校の性教育で学習した項目、性教育への評価)

性知識への関心 (性について知りたいこと)

性情報源 (友人、学校・教師、メディアなどの影響)

性知識* (避妊や性感染症などに関する知識)

(5) 友人関係

学校の友人関係のイメージ、友人と街に遊びに行く頻度、よく話をする同性・異性の友人の有無、付き合っている人・性交をしている人の有無、友人の性経験への関心、性に関する会話の程度

(6) 家族関係

家庭のイメージ、母親の職業、きょうだい構成

(7) メディア利用状況

専用のテレビ・ビデオ・パソコンの保有、携帯電話の利用頻度、インターネット (SNS も含む) の利用状況

3. 調査の対象と方法

今回の調査では、次のような層化三段法で調査対象者の抽出を行った。すなわち、まず従来の調査との継続性も考慮しながら、都市規模ごとに調査地点を 11 地点選定した。その内訳は人口が 100 万人を超える大都市 4 地点 (札幌市、東京都、京都市、福岡市)、その他の中都市 4 地点 (青森市、弘前市、松江市、熊本市)、町村 3 地点 (宮城県、栃木県、高知県) である。

次に、この 11 地点から地域規模や学校種別、生徒数などを考慮して中学校 9 校、高校 11 校を選んだ。最後に、選ばれた学校の各学年から、当該学校とも相談しながら同意の得られた学級を調査対象集団として選定した。そして、こうして選出された調査対象者に対して、自記式集合調査を実施した。すなわち、日

本性教育協会から派遣された調査員が学級に赴いて、原則として封筒に入れたまま調査票を配布し、調査の趣旨や記入上の注意を説明した。そして、その場で調査票に記入してもらい、封筒に入れて回収に当たった。調査に要した時間は中学生で 30 分程度、高校生では 40 分程度であった。なお、プライバシー保護のため、調査員は生徒たちと面識のない者を派遣し、調査校の担当者 (担任等) にはその場から退出していただいた。ただし、学校の事情等で担当教師がその場に居残ることもあったが、その場合は机間巡視などはせずに、一か所に留まってもらった。

これに対して、大学は、上記 11 地点のうち、大都市 4 地点および中都市 4 地点のなかから学校種別などを考慮して大学 31 校を選び、教員に教室で封筒に入った調査票を配布し、調査の趣旨を説明してもらった。そして、調査に同意した学生が自宅等で調査票に記入し、原則として翌週の授業で回収を行った。

こうした調査は、2011 年 10 月から 2012 年 2 月にかけて実施された。その結果、中学生 2,504 名、高校生 2,578 名、大学生 2,600 名、合計 7,682 名から調査票を回収することができた。そこで、このなかから全国の生徒・学生数の分布を考慮しながら、2011 年度の文部科学省『学校基本調査』などをもとに調査地点・学年・性別で層化し、一定数を割り当てる形で事後ウエイトをかけ、最終的には表 2 に示した標本を今回の分析対象とした。

4. 主要な結果

まず、ここでは主要な性経験として (デート経験・キス経験・性交経験) をとりあげ、この 37 年の間に (ただし、中学生の調査は 1987 年以降である) 学校別・性別にどのような変化が起こったか示しておこう。

4-1. デート経験

まず、デート経験率については図 1 に示した。大学生についてみれば、調査が開始された 1974 年時点から男女とも 7 割程度の者が経験しており (具体的な数値は 7 ページの付表参照)、この時代からデートは多くの大学生によって経験される行動であった。その後も大学生のデート経験率の伸びはわずかであり、男女とも 1993 年には 8 割を超え、その後もほぼ同じ水準

表2 対象者の構成

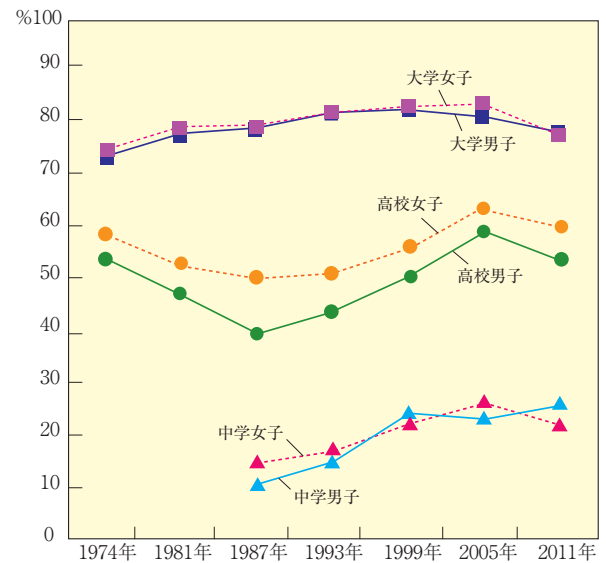
	学 校 種 別 (人)				合計
	中学	高校	大学 (国公立)	大学 (私立)	
(a) 地域規模別					
大都市	1766	1705	824	1612	5907
中都市	738	286	112	10	1146
町 村	0	587	—	—	587
(b) 学年別					
1 年	832	859	222	411	2324
2 年	834	859	250	393	2336
3 年	838	859	254	387	2338
4 年	—	—	211	430	641
(c) 性 別					
男 子	1260	1289	521	922	3992
女 子	1244	1289	415	700	3648
合 計	2504	2578	936	1622	7640

で推移している。また、性別によって経験率の差が小さいこともデート経験の特徴である。ところが、今回の2011年調査では、男女とも77%と8割を割り込み、初めて減少に転じた。

これに対して、高校生のデート経験率には性差が大きく、どの調査年度でも女子のデート経験率が男子の経験率を上回っているという特徴がある。とくに1987年には10ポイント、1993年には7ポイントほど男女間で差がみられた。ただし、1999年以降はその差は縮小傾向にある。時系列変化に注目すると、1974年から1987年にかけては、男女ともデート経験率は減少もしくは停滞傾向を示していたが、1993年以降は男女ともデート経験率の増加が著しい。とくに男子は1993年には44%程度であったデート経験率が2005年には59%にまで伸び、このことが男女のデート経験率の差を縮小させたと言える。しかし、大学生と同様、2011年調査では、高校生においても男女ともデート経験率の低下がみられ、男子では5ポイント、女子でも3ポイントほどデート経験率が下がっている。

中学生のデート経験率もやはり1987年当時は女子が男子を4ポイントほど上回っていたが、1993年から99年にかけて、とくに男子で増加傾向がみられたために、両者の差異は縮小した。ただし、1999年から2005年にかけては、男子でデート経験率がほとんど変わっていないなかったために、再びデート経験をめぐる性差が拡大する兆しがみられた。他方、2011年の中学生のデート経験率は、2005年に比べると、男子ではほとんど変

図1 デート経験率の推移



化はなかったが、女子で4ポイント近く減少している。

4-2. キス経験

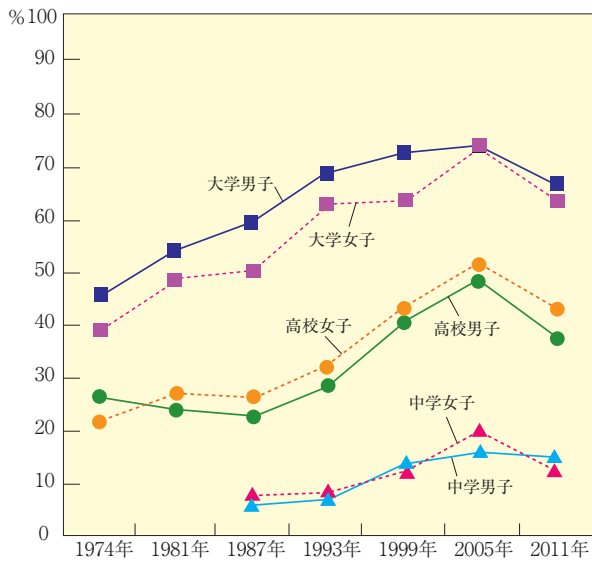
次に、同様にキス経験率の推移を学校段階・性別ごとに示したものが図2である。

大学生からみると、まず男子では1987年から1993年にかけてキス経験率が増加している。1974年には男子大学生のキス経験率は45%に過ぎなかったが、1993年には68%にまで上昇している。しかし、1993年から2005年にかけては、男子大学生のキス経験率の上昇傾向は鈍化し、70%程度で頭打ち状態にあることがわかる。これに対して、女子の場合は1974年から1981年にかけて、1987年から1993年にかけてそれぞれ10～13ポイントほど段階的にキス経験率が上昇した上に、1999年から2005年にかけても10ポイントを超える伸びを記録している。

その結果、1999年までは大学生の場合、男子のキス経験率が女子の経験率を上回っていたのに対して、2005年には両者の性差はほぼ消滅している。これに対して、デート経験率と同様、2011年になると男女ともキス経験率にも減少傾向が顕著にみられる。2005年と比べると、男子では6ポイント、女子では9ポイントキス経験率が下がっており、男女とも1993年時点の水準に戻っている。

高校生のキス経験率についてみれば、先ほどのデート経験率と同様、1974年から1987年にかけては停滞していたが、1993年から2005年にかけて男女とも明確に経験率の上昇がみられる。この12年の間に、キ

図2 キス経験率の推移

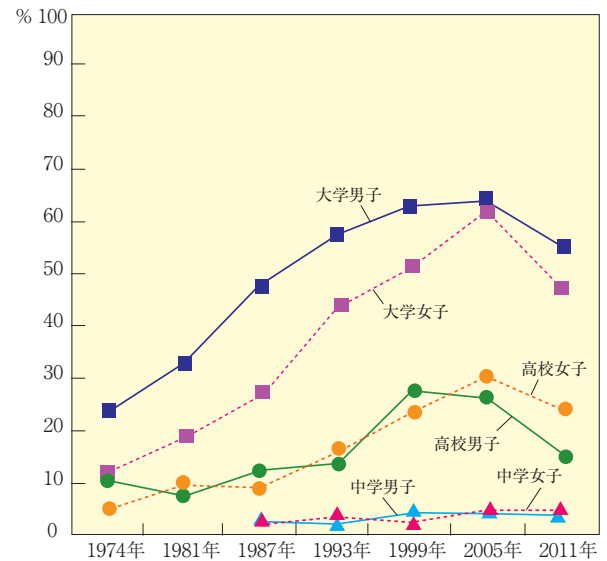


ス経験率は男子の場合28%から48%に、また女子の場合32%から52%に大幅に上昇している。また大学生とは異なり、女子のキス経験率が男子を4ポイント前後上回っていることも特徴的である。その意味では、高校生における性行動の活発化はとくに1990年代に入って女子を中心に進行したものとみなすことができる。しかし、2011年にはやはり男女ともキス経験率は大幅な低下傾向を示し、2005年時点と比較すると、男子では11ポイントと大幅な低下を示し、女子でも7ポイント近く経験率が下がっている。

最後に、中学生の場合、1987年から1993年にかけてのキス経験率の変化は男女とも少ないが、1993年から2005年にかけては男女とも10ポイント程度の経験率の上昇がみられる。とくに女子中学生のキス経験率は、1999年から2005年にかけて12%から19%へ大幅な上昇を見せ、男子の経験率を上回るに至っている。しかし、2011年では男子ではほとんど変化がなかったが、女子では7ポイントほど低下し、大学生や高校生ほどではないが、やはり性行動の経験率の低下傾向がみられた。

キス経験率の時系列変化からみる限り、青少年の性行動の活発化がみられるのは1990年代から2000年代にかけてのことであった。そして、この時期、男子大学生にはキス経験率の上昇の停滞傾向が見られるものの、中学生や高校生では女子のキス経験が活発化し、男子の経験率を上回る兆候がみられはじめた。しかし、2010年代に入ると、一転して男女とも性行動の経験率は逆に減少する傾向が現れはじめた。

図3 性交経験率の推移



4-3. 性交経験

最後に性交経験についてみてみよう。性交経験の推移は、これまでと同様、図3に示した。これについてもキス経験と同様の傾向が指摘できる。

まず男子大学生についてみれば、性交経験率は1974年から1993年にかけて23%から57%と大幅に増加したものの、1999年以降は63%程度で停滞しており、性行動の活発化に歯止めがかかったことがうかがえる。これに対して女子は、1987年から1993年にかけて26%から43%と性交経験率の大幅な伸びを見せた後、1999年には伸び率が停滞するものの、2005年になると再び10ポイントを超える経験率の伸びを示している。その結果、キス経験と同様、1999年までは男子の性交経験率が女子の経験率を上回っていたが、2005年では両者の差異は消滅している。しかし、2011年度には男子だけでなく女子においても性交経験率が大幅に低下し、2005年に比べて男子で7ポイント、女子に至っては14ポイント性交を経験する者が減少した。その結果、女子の性交経験率は再び男子を下回るようになった。

高校生の場合、キス経験率と同様、やはり性交経験率の伸びは1970年代から1980年代まではわずかである。そして、性交経験率がとくに上昇したのは1993年から1999年にかけてであり、男子で14%から27%へ、女子で16%から24%への増加がみられる。ところが、2005年にかけては男子の性交経験率はほとんど変化していないのに対して、女子では6ポイントほどの経験率の上昇がみられ、ここでも女子の性交経験率がわず

かではあるが男子の経験率を上回るに至っている。しかし、大学生と同様、2011年になると、とくに男子で経験率の低下が著しい。2005年に比べて、女子高校生の経験率の低下が7ポイントほどにとどまったのに対して、男子高校生では12ポイント近い低下がみられた。そのため、高校生においては、女子の性交経験率が依然として男子を9ポイントほど上回っている。

これに対して、中学生では性交経験率は男女ともどの年度でも2~4%程度であり、中学生にとっては性交経験はまだ少数の者が経験する性行動となっている。

4-4. まとめと今後の課題

以上のことから、この40年ほどの間に青少年の性行動はどのように変わってきたと言えるだろうか。まず第一に、キス経験や性交経験は大学生を中心に1970年代から1980年代に経験する者が増えてきたが、1990年代以降はとりわけ男子大学生でこれらの性行動経験率の上昇に歯止めがかかる傾向がみられた。その一方で、女子の大学生ではある程度の経験率の伸びが見られた結果、性行動における性差は大学生では確実に消滅した。しかし、2010年代に入ると、大学生では男女ともいずれの性行動も経験する者が減少する傾向が顕著にみられた。

第二に、中学生や高校生に関しては、1970年代から1980年代にかけては性行動の活発化とも呼ぶべき現象はみられなかったが、1990年代に入って、とくに高校生のデート・キス・性交経験、中学生のデート・キス経験を中心に経験率の大幅な上昇がみられた。その意味で、中学生・高校生を中心とした性行動の活発化すなわち性行動の低年齢化が生じたのは、1990年代以降のことであると言えるだろう。しかし、2011年には、大学生と同様、とくに高校生において性行動の経験率の低下傾向がみられた。

第三に、中学生や高校生の性行動における男女差に注目すると、デート経験は以前から男子より女子において経験率の高い経験であったが、とくに1999年から2005年にかけて、高校生のキス経験率や性交経験率は女子が男子を上回る兆しがみられ、1990年代以降の性行動の低年齢化がどちらかといえば男子よりも女子によって担われている傾向もうかがえた。また、2011年にはいずれの性行動でも経験率の低下傾向がみられたが、高校生の男女を比較すると、女子の方が性行動が

活発であることには変わりがない。女子は男子に比べ、デート経験では4ポイントほど、キス経験と性交経験では7ポイントほど経験率が高くなっている。

このような傾向をどのようにとらえたらよいだろうか。日本では2000年代後半から恋愛や性行動に消極的な青年男性を指して「草食男子」(深澤、2007)または「草食系男子」(森岡、2008)といった表現が使われるようになった。この造語は、少なくとも提唱者の1人である森岡(2011)によれば、従来の男性性すなわち「男らしさ」の呪縛に拘束されず、対等な女性観をもつために、女性との関係を性的欲望で壊すことを嫌う男性を意味していたというが、実際には恋愛だけでなく労働や消費にも意欲を失った無気力な青年男性といった拡大解釈がなされていった。ただ、本調査の時系列分析をもとに、高橋(2010)は、「草食系男子」と呼ばれる特徴、すなわち異性には無縁ではないものの、恋愛や性行動に積極的でない男子が増えていることを指摘している。それによると、大学生の男子では1993年以降、高校生男子では1999年以降、性交経験率が横ばい状態になっているだけでなく、2005年の時点では恋人もなく性交経験もない性行動の「不活発層」が、高校生男子では約3分の2、大学生男子では約3分の1存在するという。また1999年から2005年にかけて、女子を中心にデート経験やキス経験といった親密性の表出に関連した行動の経験率は増えているのに対して、とくに男子において性的関心や自慰・射精経験といった性的な欲求充足に関連した行動の経験率が低下しているという。さらに、「性行動の分極化」とも呼ぶべき現象が生じており、携帯メールを頻繁に使うといった対人的コミュニケーションが活発な層では、性行動は活発化しているが、コミュニケーションが不活発で携帯メールをそれほど利用しない層では、むしろ性行動の経験率が低下している可能性が高いという。そして、性的関心と性交経験の組み合わせから、1990年代以降は性的関心も性交経験もある高校生と、性的関心も性交経験もない高校生への分極化が進行することによって、性的関心や欲望があるのに性交経験がない高校生が減少してきたことを指摘する。そして、性行動の不活発な男子と性的関心の弱い男子、男らしさにこだわらない男子は、ある程度オーバーラップするが、携帯電話の普及などにより男女の性別分離の解消が進んできたため、女子との距離が近い男子とは重ならないと推測する。

付表 主要な性行動経験率

(%)

経験の種類	調査年度	1974年	1981年	1987年	1993年	1999年	2005年	2011年
デート	大学男子	73.4	77.2	77.7	81.1	81.9	79.0	77.3
	大学女子	74.4	78.4	78.8	81.4	81.9	81.5	77.3
	高校男子	53.6	47.1	39.7	43.5	50.4	58.8	53.8
	高校女子	57.5	51.5	49.7	50.3	55.4	62.2	58.9
	中学男子	—	—	11.1	14.4	23.1	23.5	24.8
	中学女子	—	—	15.0	16.3	22.3	25.6	22.0
	調査年度	1974年	1981年	1987年	1993年	1999年	2005年	2011年
キス	大学男子	45.2	53.2	59.4	68.4	72.1	72.3	66.2
	大学女子	38.9	48.6	49.7	63.1	63.2	72.2	63.2
	高校男子	26.0	24.5	23.1	28.3	41.4	48.4	37.3
	高校女子	21.8	26.3	25.5	32.3	42.9	52.0	43.7
	中学男子	—	—	5.6	6.4	13.2	15.7	14.3
	中学女子	—	—	6.6	7.6	12.2	19.2	12.5
	調査年度	1974年	1981年	1987年	1993年	1999年	2005年	2011年
性交	大学男子	23.1	32.6	46.5	57.3	62.5	61.3	54.4
	大学女子	11.0	18.5	26.1	43.4	50.5	61.1	46.8
	高校男子	10.2	7.9	11.5	14.4	26.5	26.6	15.0
	高校女子	5.5	8.8	8.7	15.7	23.7	30.0	23.6
	中学男子	—	—	2.2	1.9	3.9	3.6	3.8
	中学女子	—	—	1.8	3.0	3.0	4.2	4.8

この点では、高橋（2010）によると、「草食系男子」という言説は、部分的には真であるが、全体としては必ずしも当てはまらない「合成の誤謬」によって構築されたものであるという。すなわち、「女子との距離が近いのに性愛に淡泊という合成パターンは、前者の部分で同世代比較を用いながら、後者の部分では年長世代や過去の記憶と比較することで、リアリティを獲得している」（高橋、2010：7）というのである。そして、「草食系男子」という言説のジャンルは、女子が男子に身体的・社会的に庇護される必要がなくなり、男子に対しても情緒的な癒しを求める時代の産物であると結論づける。

さらに、今回の調査結果をみると、性行動の不活発化は男子だけでなく女子においても生じている。とくに大学生をみると、デート経験・キス経験・性交経験のいずれにおいても、2005年から2011年間の経験率の低下は、男子よりも女子において顕著である。この点では、性行動への積極性の低下は、男子よりもむしろ女子でみられることになる。この点に関して、渡邊（2010）は、ある大学で行った学生の意識調査から、1999年から2009年にかけて「恋人がいる」学生の比率がとくに女子で減少していること、またそれが

女子が交際自体に無関心となっていることによると指摘している。そして、「グループでつきあう異性や異性の親友はいるけれども、恋人は欲しいとは思わない」という者を、操作的に「草食系」と定義してみると、これに該当する者は男子では15%であるのに対して、女子では26%となり、「草食系」はむしろ女子に多いことになった。

このように、2000年代以降の青少年の性行動はますます多様化・分極化し、錯綜したものになった。そして、青少年をめぐる言説は、性行動の領域だけでなく、消費や労働などの領域でもさまざまに構築されるようになった（たとえば、本田・内藤・後藤、2006参照）。こうしたなかで、青少年に関する時系列的なデータを蓄積し、それを丹念に分析することで、より正確な青年像を描き出していくことは重要な課題である。しかし、その一方で、こうした調査研究が大きな困難に直面していることも事実である。実際、先の表2をみるとわかるように、本調査でも今回は町村部の中学校で調査を受け入れてくれる学校をみつけることができなかった。また、サンプルに偏りが生じていたので、先に述べたように『学校基本調査』をもとに事後的にウエイトづけによってデータを補正した。学校

調査に限らず、若年層を対象とした調査の回収率の低下が指摘されているが、本調査にしても今後、継続的に青少年の性行動に関して正確なデータを収集するために、これまで以上の工夫が必要になってくることは言うを俟たないであろう。

酒井（2009）は、本調査のような学校をフィールドとした調査において学校へのアクセスを阻害する要因を以下の6点に整理している。すなわち、

- ① 日本の学校の閉鎖性：たとえばイギリスでは学校にはアカウントビリティがあると考えられ、外部者からの見学依頼は基本的に断れないが、日本の学校にはそのような考え方がなく、外部者が立ち入ることが難しい。
- ② 個人情報保護法の足かせ：2005年に施行された個人情報保護法によって、たとえば教室での観察や会話の採取にビデオを用いることが難しくなった。
- ③ 教師の多忙化：教師の仕事量の増大が深刻化するなかで、教員にこれ以上の負担をかけたくないという理由で、管理職が調査の実施を断ることが増えた。
- ④ 学校組織の構造的な問題：学校は官僚制の発達した他のフォーマルな組織に比べると、部署間の連結が緩やかであるため、管理職が調査を了承しても、学年主任や担任教師から調査へのクレームがついて調査の実施が不可能になることがある。
- ⑤ 教員異動の多さ：近年、公立学校の教員異動のインターバルが短くなっているため、たとえば年度替わりの前に次年度の調査について確約を取ることが難しくなった。
- ⑥ 社会調査の本質に関わる問題：社会学における調査はしばしば自明視された常識的思考を打ち破り、教員の行為の隠れた帰結を暴き出すことを目的としているが、それに対して教員に当惑や反発が生じることがある。

これらの指摘に加えて、本調査の場合、青少年の性行動という微妙な問題（たとえば性被害の実態）を扱

うので、実際、学校に調査依頼に行っても、学校側に調査実施に対する警戒（性被害について尋ねて二次被害を引き起こすのではないかとといった懸念など）があったり、依然として「寝た子を起こすな」といった青少年の性に関する教員の意識が垣間見られることもある。さらに、生徒の保護者や学校評議会からのクレームに管理職が神経質になっている場合もある。こうしたことが、本調査のように、高度にプライバシーに触れる調査研究をますます困難にさせていく可能性も否定できない。

こうした学校調査の困難を克服していく方策として、酒井（2009）は、「アクションリサーチ」の必要性を指摘している。学校におけるアクションリサーチとは、「学校が抱える問題に焦点を当て、その解決にあたることも含めて取り組もうとするもの」（酒井、2009：17）を意味する。これはフィールドとしての学校が抱える問題の解決に、研究者も積極的に関わろうとするものである。しかし、このアクションリサーチもインフォーマント（調査対象者）との関係をどのように構築し、教育実践と結びつけていくかという課題もある。そこで、酒井（2009）は、「参加型アクションリサーチ」すなわち研究者が現場教員と対等の立場に立ち、教員と共同研究をすすめるという研究スタイルを推奨している。

本研究でも、今回、生徒・学生への質問紙調査と並行し、はじめて調査対象地の養護教員に対する聞き取り調査を行った。そのなかでは、生徒の男女交際や性行動に関して、しばしば相談を受ける養護教員が、どのような課題を抱えているかも尋ねている。そのインタビュー記録の分析は今後進められるが、こうした現場の声をふまえて今後の調査を企画したり、調査結果を学校現場にフィードバックしていくことも含めて、本調査のあり方を検討していくことは、今後に残された大きな課題であると言えよう。

なお、本調査の報告書は下記より購入できます。

『青少年の性行動』

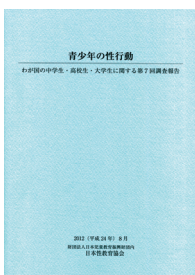
—わが国の中学生・高校生・大学生に関する第7回調査報告—

編集／(財)日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 (JASE) ／「青少年の性行動全国調査委員会」

◆ A 4判：72 ページ、頒価 1,000 円（税込み）

送 料：1冊 210 円、2～3冊 290 円、4冊 340 円、5冊以上は無料。

◆ JASE ホームページ <http://www.jase.faje.or.jp/pub/seikoudou7.html> からお申し込みいただけます。または、Email info_jase@faje.or.jp TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478



アメリカで最初の女性宇宙飛行士

7月23日、17か月に及ぶ膀胱癌との戦いの末にサリー・ライドが亡くなりました。61歳でした。彼女はアメリカ史上初めて宇宙に行った女性の宇宙飛行士でした。「サリー・ライド・サイエンス」という名の子ども向け科学教育企業が、創業者である彼女の死を告知した中のさりげない一文に、アメリカ中の少なからぬ人たちが驚きました——「遺族は27年間連れ添ったパートナー、タム・オショーンシー……」。彼女がレズビアンだったことは知られていなかったのです。

サリーはロサンゼルスに生まれました。子どものころは男の子たちに交じってフットボールや野球をし、さらにはプロのテニス選手にもなろうとした活発な女の子でした。タム・オショーンシーと友だちになったのもテニスを通じてでした。12歳のときです。その後シェイクスピアに魅せられスタンフォード大学の英文科に進んで学士に、次にはレーザーに興味をもって物理学も専攻し博士号まで取得してしまいます。

1978年、「宇宙飛行士募集」というNASAの新聞広告に8000人以上が応募し、合格した計35人の中にサリーがいました。女性は彼女を含め6人でした。それから5年、1983年6月18日に彼女はスペースシャトル「チェレンジャー」に乗り込み、地球軌道に乗った米国初の女性になったのです。

初めての女性宇宙飛行士に、当時のメディアは興味本位な質問をしたものです。「宇宙飛行があなたの妊娠器官に影響を及ぼす恐れは？」とか、「仕事で失敗したら泣きますか？」とか。前者への答えは物理学者らしい厳格さで「その証拠はありません」。後者へは同僚の男性飛行士の名前を出して「リックにはどうして同じ質問が出ないのかしら？」

そういう時代でした。レズビアンがどうだこうだと言う以前に、まずは女性の社会進出というものが好奇の目にさらされていた時代。

彼女はじつは一度、同僚飛行士と結婚しています。結婚は5年間続きましたが、プライベートな生活はメディアには全く露出させず（今回の病気のこともほとんど誰にも告げていなかったほどです）、87年には離婚しました。タム・オショーンシーとはこの間の85年にロマンティックな交際が始まるのです。

サリー・ライド・サイエンス社広報はこれまで2人の関係が明らかにされたことはないとしています。タムは同サイエンス社のCOO（最高執行責任者）で取締役副社長、サリーとの共著もありました。もっとも、サリーの妹ベア・ライドは（彼女もレズビアンです）「姉はタムとの関係を隠したことは一度もない」と言っています。「親しい人はもちろんみんな知っていた」「私たちがタムは家族だと思っている」と。

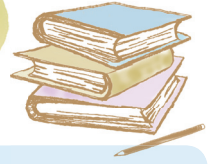
米国であってすらゲイ男性たちの話題のほうを取り上げられがちですが、じつは静かに堅実な（という言い方も変ですが）生活を営んでいるレズビアンは米国でも日本でも同様に多くいます。先日、私が日本に一時帰国した際も、ともに離婚女性で互いの子どもたち計3人といっしょに家庭を作っているレズビアン・カップルの自宅に伺って楽しく食事をさせてもらいました。

女性のほうが堅実だというのは幻想ですが、ただ、子どもがいるカップルというのはそれだけで想像以上に現実の生活に責任を持っている／持たねばならないのは本当だと思います。いや、そんなことを言えば何でもそうですね。子どものあるなしにかかわらず、オトナになるということは現実を見据えて生活してゆくということです。それは時に、LGBTであるかどうかということとは別にとっても重要な命題なのでしょう。

サリー・ライドとタム・オショーンシーのカップルに子どもはいなかったようですが、その代わりに子どもたちの科学的好奇心を育てる会社を作っていました。オトナになるということは誰かに貢献できるということです。それが素晴らしいことなのだとすることを、子どもたちにこそ教えてあげたいと思います。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住（19年）ジャーナリスト／作家／元・中日新聞（東京新聞）ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第17回

届かないカムアウト

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

昨今、どこの学校も夏休みが短くなる傾向にあるように思います。そんな中、わたしの勤務校では、今年から2学期の始業式を9月1日にもどすことになりました。その一週間のおかげで、さまざまな補習やクラブやクラスの活動にずいぶんと余裕ができました。

閑話休題。

わたしの勤務校では、数年前まで文化祭最終日に「教職員劇」をしていました。なぜかわたしは、新採一年目から教職員劇の台本を書き続けてきました。

台本を書くのはとてもしんどい作業です。1997年も、テーマが見つからず悩んでいました。そんな時、職員室の会話の中で「ホモネタにすれば？」という話題が出ました。わたしは「なんぼなんでも、それはあかんやろう」と思いました。しかし、一度そういう設定が頭に刷り込まれると簡単には抜け出せません。やむを得ずホモネタ路線の芝居にすることにしました。

わたしは「やるからにはゲイを笑い者にする芝居だけはしたくない」と思いました。しかし、セクシュアリティについてなんの知識もないわたしは、なにをどうすればそういう台本が書けるのかわからず、途方に控えていました。たまたま知りあいのSさんに「同性愛について、なにか知らない？」と相談をしました。するとSさんは思いもかけない返事を返してくれました。「知ってるよ」。そして、続けて「まずこれを読んで」と数枚の紙が綴じられたものを渡してくれました。それは、わたしがそれまで知らなかった、ゲイとして生きてきたSさんの「手記」でした。

その日を境に、わたしはSさんがくれるさまざまな資料を貪るように読む日々を過ごすようになりました。「ゲイってそういうことだったんだ。もしかしたら、在日や部落の子が感じてきたあの冷たい風を、同性愛の子らも感じてきたのかもしれない」。そう考えた時、ようやく台本を書く手がかりがつかめました。できあがった劇のタイトルは「coming out of the closet」。互いに拒否しあう登場人物3人が、それぞれのカミングアウトを通して、受容しあう関係の3人へと変化していく様を描きま

した。劇は成功裡に終わりました。文化祭が終わってからも、わたしは、劇にかかわってくれた人たちの協力を得ながら、セクシュアリティに関する教職員向けのニュースレターを発行しました。職場の中に徐々にセクシュアリティについての理解が広まっていった半年でした。

ところで、台本を書くべく資料を読みあさっていた時、わたしの目はひとつの言葉に釘づけになりました。そこには「トランスジェンダー」という言葉と「生まれ持った性別と反対の性別で生きる人」という説明がありました。わたしはその言葉を見た瞬間、それはわたしのことだと直感しました。ようやくその時、わたしはわたしのことを形容する言葉と出会えたのです。いま振り返ると、その瞬間からわたしの生き方は少しずつ変わりはじめたように思います。しかしそれは「楽になれた」ということではありませんでした。逆に、それまでの35年間には感じたことがなかった「しんどさ」に直面する10年間のはじまりだったと思います。

当時のわたしは、「トランスジェンダー」という言葉を獲得することで、ようやく小学校の頃から感じていた「変態」というスティグマから脱出できたと感じました。その反動からか、少し理解がありそうな人を見つけては「わたしはトランスジェンダーなんだ」と力説するようになりました。わたしにとっては、決死の思いのカムアウトでした。しかし、わたしがカムアウトした人たちは、わたしの日常とはかかわりが薄い遠くにいる人ばかりでした。身近にいて一番理解してもらわなくてはならない人には、こわくてカムアウトできなかったのです。やがて、一緒に部落や在日の子にかかわってきた先輩から「ええかげんにせい！ お前は何をしたいんや！」と怒られました。わたしのカムアウトは人間関係を変えるためのものではなく、単に自分のしんどさを垂れ流すだけのものでした。しかし当時のわたしは、まだそのことを理解できていませんでした。先輩に対しても「やっと自分のことが言えるようになったのに」と思っただけでした。そして、少しずつわたしのまわりから人は去っていきました。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

古事記のセクシュアリティ

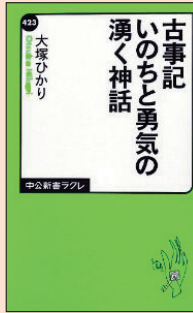
昨今のオネエ系タレントのブームは、「週刊ダイヤモンド」「東洋経済」といった経済誌にまでLGBT特集を組ませるに至った。しかしこのブームにおいて人々がもてはやしているものは、レズビアン（L）やゲイ（G）、バイセクシュアル（B）といった性的指向にあるというよりは、性別越境もといトランスジェンダー（T）の妙にある。それはその呼ばれ方が「同性愛者」ではなく、あくまで「オネエ」であることに明らかだろう。

こうした両性具有的な存在への嗜好は、日本において実は目新しいものではなくて、古代から受け継がれてきたということが、大塚ひかり著『古事記 いのちと勇気の湧く神話』を読んでいるとわかる。

例えば、勇猛果敢で知られるヤマトタケル命は、西方のクマソタケル兄弟を成敗するときに、わざわざ女装をし、乙女の姿となって剣を振った。またイズモタケルを殺すときにも、川でこれみよがしに美しい裸体を晒すことで、相手の油断を誘ってやっつけている。大塚は、「両性具有的な人こそ完璧で、そうでない者は、彼らを畏れて身近からは遠ざけながらも、一方で仰ぎ見るという構造があった」と分析する。

たしかに日本社会の暗渠には、男が女性的な美をまとうことへの官能が流れているようにも思える。牛若丸の伝説や、信長の稚児であった森蘭丸、島原の乱の天草四郎、新撰組の沖田総司、あるいは、戦後「神武以来の美少年」ともてはやされた若き日の美輪明宏…などへの憧憬は、そのような欲望の顕現ではないか。もちろん江戸時代に興隆を極めた陰間茶屋や、性別越境の美を洗練させた歌舞伎の女形の例を挙げるまでもなく。

政治学者の丸山政男は論文「歴史意識の『古層』」のなかで、日本において「歴史の展開を通じて執拗な持続低音としてひびきつづけて来た思惟様式」を、まさに



古事記 いのちと勇気の湧く神話

大塚ひかり著
中公新書ラクレ
861円（税込み）

「古事記」などの記紀神話を分析することで取り出してみせた。大塚による古典の読解にも、同様の趣がある。

イハレビコ（神武天皇）はオホモノヌシノ神の娘を皇后にした。それは「彼女の母である“美人”が大便秘中、三輪のオホモノヌシノ神の化けた“丹塗矢”に“ほど”…女性器…をつつかれ、その後、人の姿となった神とまぐはって生まれた娘なので“神の御子”。だから皇后にふさわしい」という理由だった。これについて大塚は、「古代人は、一見、恥ずかしかったり汚かったりするものでも、それをないがしろにすると、手痛いしっぺ返しを食らうと考え、それらのパワーを取り込み、あやかろうとする」と考察し、そこに日本文化の一つの傾向を読み取る。

本書にはそうした個性的な解釈が他にもたくさんある。よく知られるように国造りをしたとされるのはイザナキ・イザナミであるが、彼らはことあるごとに先に現れた神々にお伺いを立てた。その神々が名前も記されず複数いることから、「日本は国造りのおおもとですら最高責任者が誰か分からず、日本的無責任体制の原点はこうした八百万の神の存在にあるのではないかと、大塚は主張する。

さらに、記紀神話で独身の神様、“独神”が活躍していることに注目したり、古代人が意外と母性愛にとらわれていなかった実態を見いだしたり…大塚の着眼は実に新鮮である。こうしたユニークな議論が可能なのは、彼女が在野の研究者であるがゆえに、自由な表現が許されていることにもよるだろう。もちろんその背景には、ちくま文庫の『源氏物語』の現代語訳を任せられるにふさわしいほど、古典に対する広く深い知識があるわけだが。

そういう大塚の読みに導かれて、私たちは日本における執拗低音の一つを、本書で聴き取ることができるはずである。それは儒教や仏教、西洋文明などによって色づけられる以前の、日本の性そのものなのかもしれない。

（作家 伏見憲明）

9/9 (日)
 10:00~16:30

第3回世界性の健康デー東京大会 東京性教育研修セミナー 2012 夏 「感性と性感の幸せな関係」

内容 シンポジウム「性のヘルスプロモーション円卓会議」ファシリテーター：渡會睦子(東京医療保健大学)、**トークセッション**「感性と性感の幸せな関係」奥村敬子(成田記念病院・泌尿器科医長)×水嶋かおりん(メイクラブアドバイザー)、「グッズから考える性の健康」ローション博士・OL 桃子ほか、記念ポスター展示、ミニワーク、ブース出展ほか。

世界性の健康デー(WORLD SEXUAL HEALTH DAY: WSHD)は「性の健康」を改めて考えて推進する日です。2010年に世界性の健康学会(World Association for Sexual Health: WAS)が9月4日と制定しました。日本でも世界と連動して2010年から記念イベントを開催しています。今年のWAS共通テーマは「性の健康——多様性に富むこの世を生きるあらゆる人々に——IN A DIVERSE WORLD SEXUAL HEALTH FOR ALL」です。東京大会メッセージは、「感性と性感の幸せな関係」としました。性の健康のためにはココロで感じる感性と、カラダで感じる性感のバランスが大事です。様々な立場の大人が性の健康に関わる様々な側面から性の多様性を語り、若者を対象に性のヘルスプロモーションを図ります。

会場 ルークホール(持田製薬株式会社本社ビル)(JR 四谷駅徒歩5分)

定員・参加費・問い合わせ

参加費/1,000円
 主 催/世界性の健康デー 東京大会実行委員会事務局
 問合せ先/世界性の健康デー 東京大会実行委員会事務局
 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-8-3 TOC 第1ビル8F Link-R内 実行委員長:早乙女智子/事務局長:柳田正芳
 TEL 03-6427-3658 FAX 03-6427-4021 E-mail info@wshd.jp URL http://tokyo.wshd.jp

対 象/18歳以上(お子さん連れ可)
 協 賛/日本性教育協会
 ※会場に関するお問い合わせ等含め、すべて下記にご連絡ください。

9/9 (日)
 13:00~16:00

わたしわたしのからだは女のもの 女性への暴力はNO!! 「からだと性の自己決定」について考えよう ~女性のからだと性はどのように扱われてきたか~

【会場】 あすてっぷ KOBЕ (神戸市男女共同参画センター) セミナー室1
【講師】 高見陽子(ウィメンズセンター大阪)、近藤恵子(全国女性シェルターネット)、加藤治子(はるウィメンズクリニック)

【問い合わせ先等】

参加費/無料
 定 員/60名(先着順、定員になり次第締切)
 主 催・問合せ先/ウィメンズセンター大阪・神戸事務所(Cサポート・こうべ内) FAX 078-928-2628

9/15 (土)
)
9/17 (月)

ハートブレイク セクシュアリティを伝えるための学習会 2012年度宿泊学習会~アドバンスコース~

【会場】 兵庫県篠山市・ハートブレイクセミナーハウス
【問い合わせ先等】 参加費/30,000円 定員/8名
 主催・問合せ先/〒564-0001 大阪府吹田市岸部北3-29-11 ハートブレイク大阪事務所
 TEL 06-7504-6489 (平日10:00~17:00) FAX 06-7504-6490
 E-mail heart-sasayama@nike.eonet.ne.jp